

琉球諸島考古学文献散歩（1）

Book Review on Ryukyu Archaeology (1)

安里 嗣淳
ASATO Shijun

神田孝平 著 『NOTES ON ANCIENT STONE IMPLEMENTS OF JAPAN
日本石器時代図譜』（著者蔵版）1884 の周辺
— 椅の原型石斧の発見と資料の動き —

1884（明治17）年に著者蔵版として出版されたこの本は、琉球関係の考古資料を最初に掲載した文献である。神田が収集した石器を種別に収録したもので、琉球諸島関係資料は薩摩国（現在の鹿児島県）大島発見の5点の石斧である。この石斧は後に「椅の原型石斧」と命名された丸ノミ型石斧や亀頭状石斧で、最近の調査成果で南九州を中心に展開した縄文時代草創期に属する石器文化であることがわかり、注目されている。

1. 報告された石斧

奄美発見の5点の石斧が掲載された、同書中の該当項目を示す。

Plate IV. Raifu or Thunder-bolts

Fig. 3. Point groove-shaped. A head at the upper end. Chlorite-schist.

Locality of discovery, Oshima in Satsuma.

Plate V. Raifu or Thunder-bolts

Fig. 5&6. Point chisel-shaped. A head at the upper Chlorite schist.

Locality of discovery, Oshima in Satsuma.

Fig. 7&8. Point groove-shaped. A head at the upper end. Talc-schist.

Locality of discovery, Oshima in Satsuma

このPlateのリストは左側ページにあり、右側には折り込み実測図が示されている。見開きで両方の情報がわかるようにとの配慮である。神田は1886年に図を省略した邦訳本を『日本大古石器考』と題して出版した。その該当項目は次のとおりである。

第四版 第三図、壺刃ニシテ上部ニ頭ヲ具セリ質ハ綠泥板石ナリ出所ハ薩州大島ナリ

第五版 第五図、片刃ニシテ上部ニ頭ヲ具ス質ハ綠泥板石ナリ出所ハ薩州大島ナリ

第六図、第五ニ同シ

第七図、壺刃（ニ）シテ上部ニ頭ヲ具ス質ハ滑板石ナリ出所ハ第五ニ同シ

第八図、第七ニ同シ

RaifuはThunder-boltsと英語表記されているように雷斧すなわち石斧のことで、江戸時代以来の呼称が明治前期にも使用されていることがわかる。神田はこの石斧の特徴をとらえて刃部を「壺刃」および「片刃」と記している。壺刃とは丸ノミ形のことである。「頭ヲ具セリ」とは石斧の頭部がふくらみをもっている形態を指している。この二つの特徴こそは「椅の原型石斧」の独特的の形態であり、すでに最初の文献で指摘されていることが興味深い。神田孝平がこの石斧を入手した経緯については不明である。また、神田が報告した奄美発見の石斧はこの5点であるが、別の文献に拠ると実際には

9点所蔵していたようである。また、発見地は奄美大島笠利町の赤木名であることも判明している。

2. 神田孝平の経歴

神田孝平は1830（天保元）年に美濃国（岐阜県）に生まれ、名を孟格といい通称を孝平（こうへい）といったが、1872（明治4）年以降は「たかひら」と称した。「淡崖」「唐通」などの号をもつ。漢学、のちに蘭学も学ぶ。33歳のとき江戸幕府の蕃書調所の数学出役となり、後に開成所教授並となる。明治新政府になると、いくつかの要職を経て1872（明治4）年に兵庫県令に任命される。本書の表紙に英文で「Ex-Govenor of Hiogo」とあるのはこの職を指している。刊行時にはすでに他の職に移っているにもかかわらずこの職を記しているのは、現在でいう県知事職にあたるからであろう。1876年に地方官会議幹事長、翌1877年に元老院議官となる。同年に一時文部小輔に就き、1881（明治14）年に再び元老院議官となって元老院廃止まで務める。本書が刊行されたのは、この元老院議官の頃で、表紙には「Member of Genroin」と記されている。貴族院の開設に伴って勅撰の議員となるが、病気のため翌年辞退。1898（明治31）年7月5日逝去。男爵授与。

神田は多方面に業績を残した人である。『經濟小学』『数学教本』『和蘭政典』などの著書があり、「經濟」という用語を確定した人としても知られている。また、明治初期の知識人の集まりである「明六社」の活動に参加し、財政経済論などを『明六雑誌』に寄稿している。1880年に東京学士会院が設立されたことに伴い、委員に選任される。院の会長は幕末の長崎遊学時に知り合い「明六社」でも一緒に活動した福沢諭吉であった。

3. 神田孝平と考古学

(1) モースとのかかわり

1877（明治10）年の秋、東大に招聘されていたアメリカの動物学者モースが大森貝塚を発掘したのが、日本における近代的な考古学の開始となった。実はこのときの文部小輔はその年の2月に任せられたばかりの神田であった。神田はモースの発掘品を天皇に見せたいと考え、時の太政大臣三条実美に上申書を提出してこれを実現している。1879年に大森貝塚の報告書が英文で刊行された。また、モースの発掘に参加した佐々木忠次郎、飯島魁によって『陸平貝塚篇』が、そしてハインリヒ・シーボルトの英文『日本考古学』などが刊行された。神田は当然これらに接したわけで、本書を英文で著したものも当然のことであった。なお、神田の身内には英文学者もあり、あるいはその手助けもあったかもと考えられる。一方では神田は『和蘭政典』を著すほど外国語になじんでいる人もあるので、自身の英文かもしれない。多才な人物ではある。

(2) 東京人類学会とのかかわり

神田が本書を刊行した年の1884（明治17）年は、東大学生の坪井正五郎や白井光太郎らが中心となって人類学会が発足した年でもある。その第三回の会合が開かれた後に、午後から9人の参加者が神田孝平宅を訪れ、蒐集品を見学している。当時、神田は官吏、知識人としてすでに有名な人であった。おそらくこのときに、奄美発見の丸ノミ石斧も披露したのであろう。1887年に神田は推されて東京人類学会会長となった。そして機関誌『東京人類学会雑誌』に39篇の論考を寄せている。

(3) 鳥居龍藏とのかかわり

1890年に徳島から上京した鳥居龍藏は、翌年のある日駿河台の神田孝平宅を訪ねている。そして、神田から学問上のさまざまな話を聞き、好印象をもつと同時に研究課題についても影響を受けたと述懐している。周知のように鳥居は沖縄考古学の開拓者として業績を残した人であるが、両者が東京で親交があったことも興味深い。

(4) 奄美発見の石斧の入手経路

神田がどのような経緯で奄美発見の石斧を入手したかについては、未だに不明である。次にふれる本山彦一の図録に「赤木名」の名があり、私が現物を実見した際にも石斧に「赤木名」の注記を確認したので、奄美発見であることは確かである。おそらく一括して発見された「埋納品」ではないかと察せられる。当時全国各地に江戸時代からの伝統をひく蒐集家がいたようだが、薩摩には「白野」なる人物がいたらしい。あるいはこの人物を介した可能性も考えられるが、定かではない。

4. その後の神田資料

- (1) 若林勝邦の再報告 「種子島及ビ大島ノ石斧」『東京人類学会雑誌』第七卷
第七十一号 1892年

若林勝邦が1892年に神田所蔵の石器のうち、奄美大島笠利町赤木名発見の石斧10点と、若林自身が日向（宮崎県）に赴いた時に実見した石斧1点とを実測図を添えて、上記の文献に記載している。若林は人類学会の初期からのメンバーで、坪井正五郎とともに会の運営にあたっている。おそらく当時会長を務めていた神田とは会の運営を通して近い関係にあったことから、神田所蔵の石斧を扱ったのだろう。

若林が奄美発見石器のみを選んで扱った動機は、九州南部の島嶼地域および奄美地域においては石器時代遺物が未発見であったことから、これを最初の知見として発表したかったということが、序文からうかがえる。若林は平面図、側面図をとり、縮尺を付して10点の大島発見石斧を掲載した。神田の著作では5点のみであったが、これにより実は10点であったことが判明した。

(2) 神田資料が本山彦一へ渡る

神田孝平は1898（明治30）年に逝去したが、彼が所蔵していた考古資料は関西の本山彦一に渡った。本山は1853年に熊本で生まれ、1871年に上京して洋学を修め、さらに福沢諭吉のもとで学んだ。兵庫県学務課長や神戸師範学校長を歴任し、その後1882年以降は新聞業界で活躍するようになった。1888（明治21）年に大阪毎日新聞社相談役、1903年には51歳で同社の社長になっている。1930年に貴族院議員に勅任され、1932（昭和7）年に80歳で逝去した。

新聞社の社長時代に京都大学の発掘を援助したり、自ら遺跡調査を企画するなど考古学への趣味にも熱心であった。晩年に神田孝平の蒐集品約1300点を譲り受け、自己の所蔵資料とあわせて『富民協会』の三階に「農業博物館・本山考古室」を設けて陳列した。このときに、奄美発見の石斧も引き取られたのである。

1932（昭和7）年本山彦一翁が逝去した。その一年忌にあたり、京都大学の末永雅雄が編集し、濱田耕作、梅原末次の修正を経て、とりあえず収蔵品の写真集として『本山考古室図録』が刊行された。これは一年忌に間に合わせるために、以前から編集中であった陳列品目録から急遽写真図録のみを出版したものである。そして、1934（昭和9）年に一部の実測図をつけた陳列品の遺跡地名表を内容とする『本山考古室目録』が刊行された。さらに後にこの二冊がまとめられて『本山考古室要録』と題する合冊本となった。上記の目録のなかに、奄美発見の石斧も一部実測図付で収録されている。

(3) 本山資料が関西大学博物館へ渡る

本山彦一の逝去後、末永雅雄の尽力により関西大学が本山家から「本山考古室」の所蔵品を購入した。そして、同大の考古学等資料室、現在の大学博物館に収蔵され、現在に至っている。私は1996年11月に同大で当該石斧を実見し、撮影した。しかし、現存するのは6点だけであった。

(4) 現在の神田資料

これまでの経緯は下記の通りである。神田孝平は10点所蔵、本山彦一は8点所蔵していた。関西大学には6点所蔵されている。4点が所在不明ということである。

神田孝平著作	若林勝邦論考	本山彦一目録	関西大学
五版 6 図	第一図	190左	現存
五版 8 図	第二図	?	×
	第三図	?	×
五版 7 図	第四図	○	現存
五版 5 図	第五図	190右	現存
四版 3 図	第六図	?	×
	第七図	○	現存
	第八図	○	現存
	第九図	○	現存
	第十図	?	
計 5 点	計 10 点	計 8 点	計 6 点

註 本山彦一所蔵資料は図示としては 2 点のみだが、目録では 8 点である。

?マークの 4 点のうち、いずれか 2 点が関西大学への譲渡時には不明。

5. その後の栴ノ原型石斧の発見

神田孝平が報告した石斧は頭がふくらみをもつ「亀頭形」と、刃部の片面がスプーン状にくぼむ「丸ノミ形」が基本的な特徴で、両方の特徴を備えるものを基本形として一方だけの特徴のものも含めて、戦後南九州地域で相次いで発見されている。

1962年、沖縄島北部のカヤウチバンタ遺跡から、同類の石斧が宇栄原宗貴氏によって表面採集された。これは宮城長信によって『南島考古だより』第14号（1974）に、「辺戸石山遺跡出土の石器について」と題して写真付で紹介されている。この時点では珍しい丸ノミ石斧という認識にとどまっていた。また、1993年鹿児島県加世田市栴ノ原遺跡で初めて正式の発掘調査において出土した。しかも薩摩火山灰の直下から出土し、その時期が縄文草創期に属することが明らかとなった。（『栴ノ原遺跡』1994年、加世田市教育委員会）カヤウチバンタ採集の石斧とほとんどソックリであることから初めて注目され、これまでの文献探しが開始された。

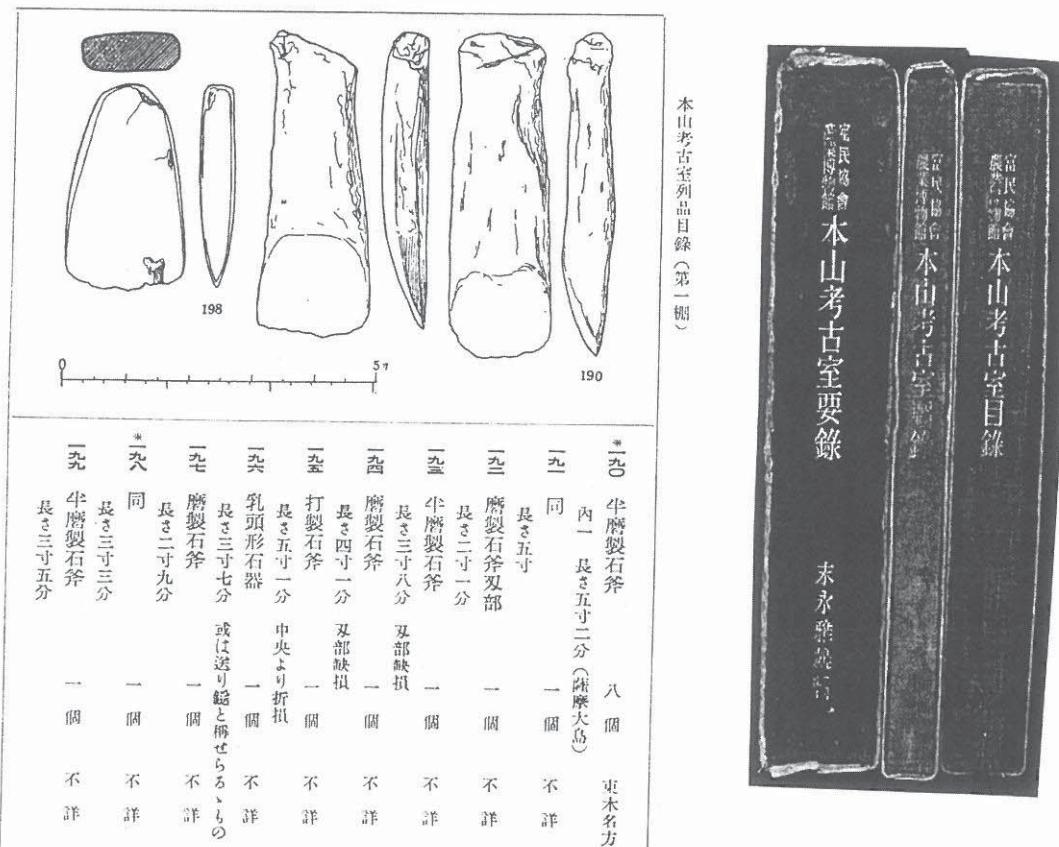
そして、小田静夫の研究で既に他の遺跡でも発見されていることがわかり、南九州を中心として分布することが明らかとなったのである。小田はこれを著書『黒潮圏の考古学』（2000年、第一書房）のなかにまとめている。この石斧の系譜をめぐっては小田が東南アジアとの関連を想定したが、新田栄治は「栴ノ原型石斧は東南アジアから伝わったのか」（『南九州縄文通信』1995年、南九州縄文研究会）でこれに批判を加えた。しかし小田はその後も南方との関連を示唆する言動をしている。（黒潮紀行：縄文人は丸木舟でやってきた－栴ノ原型石斧を追って－』『高知大学黒潮圏研究所報』1996）

最近、種子島西之表市の鬼ヶ野遺跡で薩摩火山灰とみられる層の下から栴ノ原型石斧が複数出土している。来年度には発掘報告書が刊行されることになっている。南九州地域で、縄文時代の古い時期に展開した石斧文化であることが、発掘によって確認されつつあるといえる。沖縄のカヤウチバンタ遺跡発見のそれは表面採集であることから、遺跡への帰属性が問題である。あるいは外品かもしれない。神田孝平が琉球諸島最初の文献に紹介した栴ノ原型石斧は、琉球諸島新石器時代の開始期をめぐる重要な資料として注目されているのである。

（あさと しじゅん：所長）



神田孝平著 “NOTES ON ANCIENT STONE IMPLEMENTS, &c., of JAPAN” の表紙・中表紙



本山彦一所藏資料『本山考古室目録』の奄美発見石斧の掲載頁
実測図は二点のみだが、下の目録に八個とある。
「東木名」方は「赤木名」の誤り。

Plate IV.

Fig. 3. Point groove-shaped. A head at the upper end. Chlorite-schist. Locality of discovery,—Oshima in Satsuma.

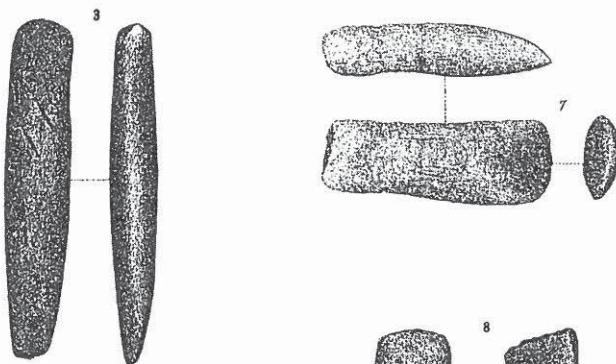
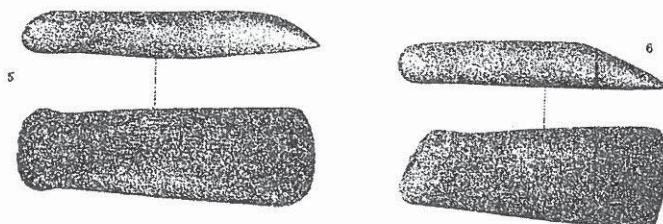


Plate V.

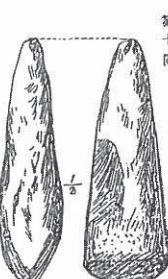
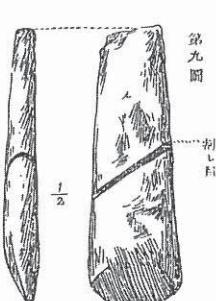
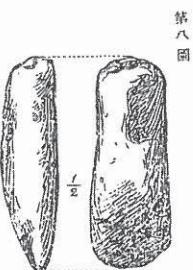
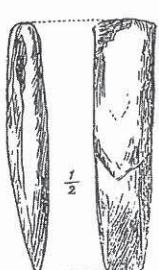
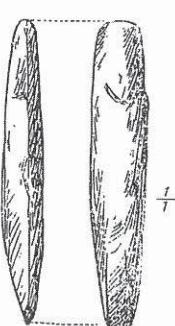
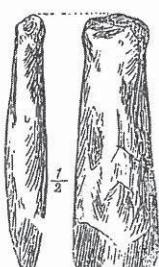
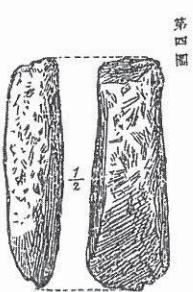
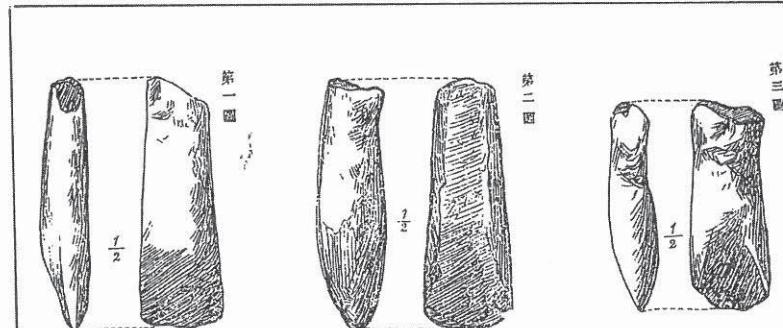
Figs. 5 & 6. Point chisel-shaped. A head at the upper end. Chlorite-schist. Locality of discovery,—Oshima in Satsuma.

Figs. 7 & 8. Point groove-shaped. A head at the upper end. Talc-schist. Locality of discovery,—Oshima in Satsuma.



神田孝平著 “NOTES ON ANCIENT
STONE IMPLEMENTS, &c., of
JAPAN に掲載された奄美発見の
石斧。縮尺なし。

図版IV・Vより関係する図のみ
を抽出。



若林勝邦の論考「種子島及ビ大島の
石斧」に掲載された神田孝平所蔵の
石斧。配列を変え、縮小してあるので、
図に付された縮尺は適合しない。